

がその例である。こうした取り組みは、動物の楽しさや素晴らしさを伝えたいという思いからである。動物園でアンケート調査を行うと、「何がしたいか」という質問への回答は、「動物のそばに行って、触れてみたい」「エサをあげたい」が必ず上位にくる。こうした思いには可能な限り応えてあげたいし、様々な手法を用いてもっと楽しませてあげたいとも思う。

ところで、「動物を見る(見せる)」ということにとどまらず、もう一步踏み込み、動物園外の人たちと連携してジャズフェスタを開催している。このイベントは、もともと園内に生息する絶滅危惧種であるゼニタナゴの保全活動支援と視覚障害者の社会進出支援を目的としたものであるが、ジャズを聞くため、いままで動物園に来ることがなかった人も足を運んでくれ、「動物園もなかなか面白いじゃないか」と言ってくれるなど、一定の成果があった。もちろん、こうした取り組みの根底には「命をつなぐ」という、動物園が果たすべき使命があることは言うまでもない。

また、絶滅危惧種のゼニタナゴが生息できるほどに園内の環境が保たれているということは、地域の生態系保護に動物園の存在そのものが重要な役割を果たしているということでもあり、ゼニタナゴの保全活動は更に進めていきたいと考えている。

ところで、大森山動物園には園の設置を規定した条例がある。この条例は市民と一緒に作ったもので、今後策定しようとしている動物園の再整備構想もこの条例がベースになる。

大森山動物園は、人間性を取り戻す「リ・クリエイト(re-create)する場」、命を感じて「命を学ぶ」、「命をつなぐ」という役割を果たそうと努めている。これらに加え、動物園は「自然に癒やされ」「生き物を感じて」「自然を知る」場でもある。こうしたことよって「人が訪れ」「人が集う」場所にもなることから、観光につなげていくことも必要である。動物園の文化施設としての役割は堅持しながら、秋田の元気にお手伝いをする場として、地域

活性化にも貢献していきたいと考えている。

さて、大森山動物園の再整備構想だが、まずは動物園が抱える様々な課題がある。

課題のひとつは、施設の老朽化であり、今後、園の施設をいかに維持していくのかが大きな課題である。

園を取り巻く自然環境にも課題があり、例えば、松枯れ病により園内の植生がかなり痛めつけられており、植生回復も重要である。

また、観光施設としての環境・施設の整備や、新たな視点から、大森山公園内の自然が多く残っているエリアをどのように動物園と関連づけていけるのかについても模索しているところである。また、動物園と大森山全体をどのような回遊計画を描けるかもポイントとなる。

加えて、どの動物園にも共通することであるが、動物園の運営や施設整備にはお金がかかり、その財源確保は大きな問題である。実際、市民の税金に大きく依存している大森山動物園にとっては、存続にも関わる重要な問題である。だが、この問題を抜きに考えることはできず、頭の痛いところである。

先に述べたとおり、大森山動物園には「リ・クリエーション」「命の学び」「命のつなぎ」という役割があるが、これをどのように具現化していくかが求められており、これらの関係性は崩さず、同心円状に昇華させていかなければならない。

大森山動物園がめざす再整備の考え方は「ミルヴェ いのちの森」の言葉に集約し、大森山公園と一体化した周遊性のあるスポットにしたいと考えている。私は、例えば大森山の谷をイヌワシが辺りを自由に飛び回る「イヌワシの飛ぶ動物園」も夢見ているし、多くの子ども達の「動物とふれあいたい」という思いを大切にしながら、日本の豊かな自然環境の中で生まれ、根底に息づく「日本人の心」も大事にして動物園にしてみたい。

命や自然を体感できる動物園、感性を大事にした動物園を目指しながら、観光振興にもつなげていきたいのである。